

医学教育 2005, 36(4): 207~213

原 著

## 模擬患者の協力を得た医療面接と身体診察実習の試み —実習前後の学習者および模擬患者の感想の比較—

阿 部 恵 子<sup>\*1</sup> 西 城 卓 也<sup>\*1</sup> 向 原 圭<sup>\*1</sup>  
菊 川 誠<sup>\*2</sup> 鈴 木 富 雄<sup>\*2</sup> 伴 信 太 郎<sup>\*2</sup>

抄録：【目的】模擬患者（SP）の協力を得た医療面接と身体診察実習（MIPEP）の今後の方向性と教育意義について検討した。【方法】SP 9 名および医学生 10 名を対象に、MIPEP を 15 分とフィードバックを 15 分間行った。実習の前後でグループ討論を行った。【結果】医学生は診察中のマナー、言葉かけが重要であると感じ、臨床に出る前の自信にもつながると感じた。SP は身体を直接触ることの重要性和事前準備などを十分に行う必要性を感じ、学生の前向きな態度を重要視した。【考察】SP の協力を得た MIPEP はマナー、言葉かけなど、尊重すべき人間に対する接し方を学ぶという教育意義があることが示唆された。MIPEP が今後発展していくためには、十分に配慮された事前準備が必要である。

キーワード：模擬患者、身体診察、介入前後質的分析、医学教育

### A Pilot Study of Medical Students' Medical Interview and Physical Examination Practice with Simulated Patients

Keiko ABE<sup>\*1</sup>, Takuya SAIKI<sup>\*1</sup>, Kei MUKOHARA<sup>\*1</sup>, Makoto KIKUKAWA<sup>\*2</sup>, Tomio SUZUKI<sup>\*2</sup>, Nobutaro BAN<sup>\*2</sup>

Objectives: To investigate future directions of medical interview and physical examination practice (MIPEP) with simulated patients and to clarify its educational meaning for medical students. Design: Qualitative design using 8 focus groups before and after MIPEP with simulated patients (4 pre-MIPEP and 4 post-MIPEP). Methods: Nine simulated patients and 10 medical students participated. Four physicians served as facilitators. Each student practiced consultation, including two medical interviews and physical examinations (of one male and one female simulated patient), for 15 minutes. After every consultation, students had a 15-minute feedback session with a simulated patient and a facilitator. All simulated patients and students participated in both the pre-MIPEP and post-MIPEP focus groups. Results: Through pre-MIPEP and post-MIPEP focus groups, medical students realized that an appropriate disposition and talking with patients during physical examination are helpful. MIPEP with simulated patients helps students to gain confidence before clinical practice. Simulated patients found that the value of MIPEP with simulated patients for medical students was increased by thorough course preparation and by the simulated patient's training and motivation, which was affected by the students' attitudes to MIPEP with simulated patients. Conclusion: MIPEP with simulated patients is valuable for teaching the appropriate disposition towards patients, including making physical contact and talking with patients as fellow human beings. When the students' attitudes satisfy the simulated patients, MIPEP with simulated patients can become a powerful educational method.

**Key words:** simulated patient, physical examination, pre-post qualitative analysis, medical education

<sup>\*1</sup> 名古屋大学大学院医学系研究科健康社会医学, Nagoya University Graduate school of Medicine, Department of family and Community Medicine

[〒466-8560 愛知県名古屋市昭和区鶴舞町 65]

<sup>\*2</sup> 名古屋大学医学部附属病院総合診療部, Department of General Medicine, Nagoya University Hospital

受付：2004 年 8 月 4 日，受理：2005 年 2 月 23 日

## はじめに

医療面接技法の習得において、対話の振り返りは患者の視点を理解する上で重要であり、模擬患者 (Simulated Patient 以下 SP) の協力を得たコミュニケーション教育がその大きな役割を担っていることは周知の通りである<sup>1,2)</sup>。また、医学教育におけるその有用性は海外のみならず国内でも多く報告されている<sup>3~5)</sup>。一方、診療に医療面接技法と同様に重要な身体診察技法の習得においては、従来通りの学生同士、あるいはモデルを利用した練習がほとんどである。海外では身体診察技法の習得にも SP の活動が広く普及し、身体診察実習と客観的臨床技能試験 (OSCE) への貢献度は高い<sup>6~9)</sup>。現在の日本では、SP の身体診察 (バイタルサイン・頭頸部・胸部・腹部・神経学的診察) を含む活動は一部で始まっているものの、その有用性についての報告はまだない。

SP の協力を得た医療面接と身体診察実習をパイロット的に行い、実習前後のフォーカスグループディスカッション (FGD) を通して、学生・SP の率直な感想を求め、SP の協力を得た身体診察実習の今後の方向性とこのような実習の教育意義について明らかにすることを目的とした。

## 1. 対象と方法

### 1) 対象者

参加 SP は名古屋大学 SP 研究会と近隣 SP 研究会のメンバーで、医療面接と身体診察に参加することに同意が得られた SP 9 名 (男性 4 名: 平均年齢 58 歳と女性 5 名: 平均年齢 65 歳) であった。また、対象学生は名古屋大医学部 5 年生 5 名 (男子 3 名と女性 2 名: 平均年齢 27 歳) と 6 年生 5 名 (男性 2 名と女性 3 名: 平均年齢 23.2 歳) の計 10 名で、社会経験がある学生は 1 名だった。募集方法は各学年のメーリングリストおよび、口コミで集めた。

### 2) 研究手順

研究手順は表 1 に示した。まず、実習前の FGD を SP 2 グループ (男性グループと女性グループ) と学生 2 グループ (学年男女を無作為に混ぜ 5 名ずつ) の計 4 グループでおのおの約 1

表 1 研究手順

1. 実習前 FGD (1 時間)
2. SP に対する事前打ち合わせと練習 (2 時間)
3. 医療面接と身体診察実習
学生への事前説明 10 分
1) 実習 15 分 (7 分で身体診察に移るように知らせる)
2) フィードバック 15 分
3) 移動 5 分
4. 実習後 FGD (1 時間)
5. FGD の内容を 2 人の評価者で質的に分析
6. 分析内容をメンバーチェック

時間ずつ行った。次に、SP への事前説明と練習を 2 時間ほど行った後、2 回に分けて医療面接と身体診察実習を実施した (表 1)。そして、実習後の FGD を同じメンバーの 4 グループでおのおの 1 時間ずつ行い、その内容を 2 人の評価者で分析し、最後に分析した内容の確認を参加者に依頼し同意を得た。

### 3) 医療面接と身体診察実習方法

今回は、情報収集・身体診察の一連の流れを体験し、患者に身体診察を行う際の話し方・接し方などの態度を学ぶことを実習の目的とした。すべての学生が男性 SP と女性 SP の両方の体験ができるように構成した。また、SP は男女の学生の両方を少なくとも 1 度ずつ体験した。シナリオは「37.5 度の発熱が 1 か月続き、ほかに何も症状がない患者」の設定で、2 回とも同じシナリオで行った。

診察方法は各 SP から前もって同意を得ていた診察方法に従って直接肌に触れての診察か下着の上からの診察 (女性 SP 1 名) かを診察前に指定した。身体診察時の脱衣方法に関して、(1) 服は前ボタンを開くか、あるいは T シャツを上を持ち上げるかどちらかに限定し脱がせることはしない、(2) 女性 SP はブラジャーを装着したまま診察を行うこととし、肌の露出が過度にならないように配慮を求めた。

### 4) 身体診察の項目

バイタルサインはすでに測定したものとし、用紙に書き示した。また、身体診察は眼瞼結膜の視診、頸部リンパ節の触診、呼吸音の聴診、腹部診



表 2 医療面接と身体診察実習の流れ

1. 医療面接と身体診察 (15 分)
情報収集
↓ のこり 7 分の時点でまだ身体診察に移ってない人にはカードで知らせる.
身体診察
1) 眼瞼結膜の視診      バイタルサインはカードで示す.
2) 頸部リンパ節の触診 <u>すべて所見は正常として説明する.</u>
3) 呼吸音の聴診
4) 腹部は視・聴・打・触診
2. フィードバック (15 分)
↓ 学生, SP, ファシリテーター, の 3 者で医療面接および身体診察の両面についてフィードバックをする.
3. 移動および休憩 (5 分)

表 3 インタビューガイド

1. 身体診察を含む医療面接実習をどう思いますか？
2. SP の協力を得た身体診察実習は必要だと思えますか？
3. どんな学習効果があると思えますか？
4. どのようなことが SP あるいは学生に対して問題になると思えますか？
5. 診察しても異常（所見）がないことをどう思えますか？
6. 実習を行う時期はいつが良いと思えますか？
7. 相手の性別による差を感じますか？

察の 4 項目とした．すべての項目は正常と考え説明するよう指定した（表 2）．

5) フォーカスグループディスカッションの方法  
実習前後の FGD では各グループ約 1 時間ずつ、表 3 に示すインタビューガイドを参考に自由に話してもらい、その内容をビデオに収録した．

6) FGD の分析方法  
FGD 終了後、録画した内容を忠実にテープに起こし、逐語録を作成した．その後、2 人の評価者がそれぞれ独立して、キーワードの抽出とカテゴリー化を行った．そして、評価者間で合意形成し概念を集約した．次いで、その結果を参加 SP に確認を得るためのメンバーチェックを行った．質的分析において介入前後の FGD を用いて分析比較する研究は多くはないが、Roman MS は内容・方法の比較には有用な方法であると報告している<sup>10)</sup>．

2. 結 果

1) 学生の FGD の結果

FGD の結果は表 4 に示すよう実習前には 5 つ、実習後には 4 つの概念が明らかになった．

2) 男女 SP の FGD の結果

男性 SP と女性 SP では内容的に相違がみられたため、SP の全体意見としてまとめず、男女それぞれ実習前後の内容を比較した．その結果は表 5 に示す通りである．

3. 考 察

1) 学生の FGD の考察

学生の実習前後の FGD から明らかになった概念を比較し、実習を受けたことで学生の考えがどのように変わったかを考察し概念図に表した（図 1）．その結果、主に 3 つの重要な変化が示唆された．

（1）尊重すべき人間としての対応を学ぶ重要な学習の場であることに気がついた．学生は SP との実習で診察の一連の流れ、診断を考える力を学ぶ、また、SP のフィードバックから患者の視点を学ぶことに大きな期待を持って実習に望んだ．しかし、実習を通して、診察中の言葉かけが予想以上に患者の不安を減少させる大切なスキルであること、また、SP 1 人ひとりの感じ方・考え方が異なることを経験し、人間の多様性・個性を強く認識したことが分かった．また、実習に望む学生の条件として、SP に対して失礼にならないよう配慮が大切であることに加え、SP の守

表4 学生の実習前後の概念比較 (学生のFGD)

実習前の概念	実習後の概念
(1) 学生と患者との中間的立場である SP と練習することは貴重な体験である	(1) 身体診察を含む医療面接実習は一連の流れの経験だけでなく、適切なマナー、言葉かけや配慮など、尊重すべき人間としての対応を学ぶ重要な学習の場であることに気づいた
(2) 学生は身体診察に対して練習不足で自信がもてない	(2) 女性 SP を診察することに対しては違和感を抱いた学生がいた。しかし、必要な診察技術と認識しており練習を積むことで抵抗感を減少させていきたいと思っている
(3) 学生は SP との実習に対して、特にどんな診察が必要になるかを考える力がつく、一連の流れを体験できる、フィードバックが勉強になる、の3点に大きな期待を持っていた	(3) レベル別に色々な実習の設定を設けて、練習の回数をたくさん経験したい
(4) SP に失礼にならないように実施することが重要である	(4) 臨床実習への心構えができ、自信にもつながった
(5) レベル別の継続的な実習があるといい	

表5 男女 SP の実習前後の概念比較 (SP のFGD)

	男性 SP	女性 SP
実習前	1. 医療面接と身体診察実習は必要である 2. 多くの効果が期待できる 3. 実習の事前準備・条件が非常に重要である 4. 医療面接のみの時より負担がかかる	1. 身体診察実習は学生にとって貴重な経験である 2. 多くの効果が期待できる 3. 身体診察に対して多少の不安を持っている
実習後	〈全体の合意が取れたこと〉 1. 直接診察する体験はとっても重要かつ必要な実習である 2. 触られたことに対する違和感はなかった 3. 事前準備は重要である 〈全体の合意が取れなかったこと〉 1. 評価の仕方に対する理解 2. 学生の性別による SP の気持ち 3. フィードバックの仕方	1. 体験から学ぶことができる貴重な実習である 2. 学生の態度が真面目だったので、学生に協力したいと感じた 3. SP は学生の「丁寧さ」に2通りの感情を抱いた：丁寧な言葉かけは好意的に受けとめるが、丁寧な診察には戸惑いを感じた 4. 実習前に感じた身体診察に対する不安は減少した

秘義務の徹底と敬意を持って実習を行う必要性を感じていた。これらのことから、学生は OSCE では所見を診ることを目的とし、いわば物を扱う側面が強いが、今回の実習では SP を1人の眼前に現れた人間として診ることを目的とし、尊重すべき人に対する接し方を学ぶという側面が強いと理解していることが示唆された。

(2) 練習を積むことで女性の身体診察に対する抵抗感を減少させたいと考えている。学生は女性 SP を診察することに対して、実習前は抵抗を感じつつも男女両性の SP に対して診察の練習をしたいと感じていたが、実際実習を行ってみると、普段通りできたという学生がいる一方で、「気を使いすぎて集中できなかった」「女性の SP

さんの診察に抵抗があり早く終わらせた」などの違和感を抱いていることが明らかになった。しかし、臨床で必要な診察であるため練習を積むことにより、抵抗感を減少させていきたいという前向きな姿勢も同時に持っていることが分かった。

(3) 学生は身体診察の練習回数を増やして欲しいと希望している。学生は身体診察を練習する機会が少ないために自信がもてず、患者の前で萎縮し、患者への身体診察の機会を十分活用できていないことが分かった。このことから、学生は身体診察に対する不安・抵抗感・恐怖感を減少させるだけの最低限の自信を持つことが必要と考える<sup>11)</sup>。身体診察の練習方法として、今回の異常所見がなく、診察部位が決まっている設定は初期



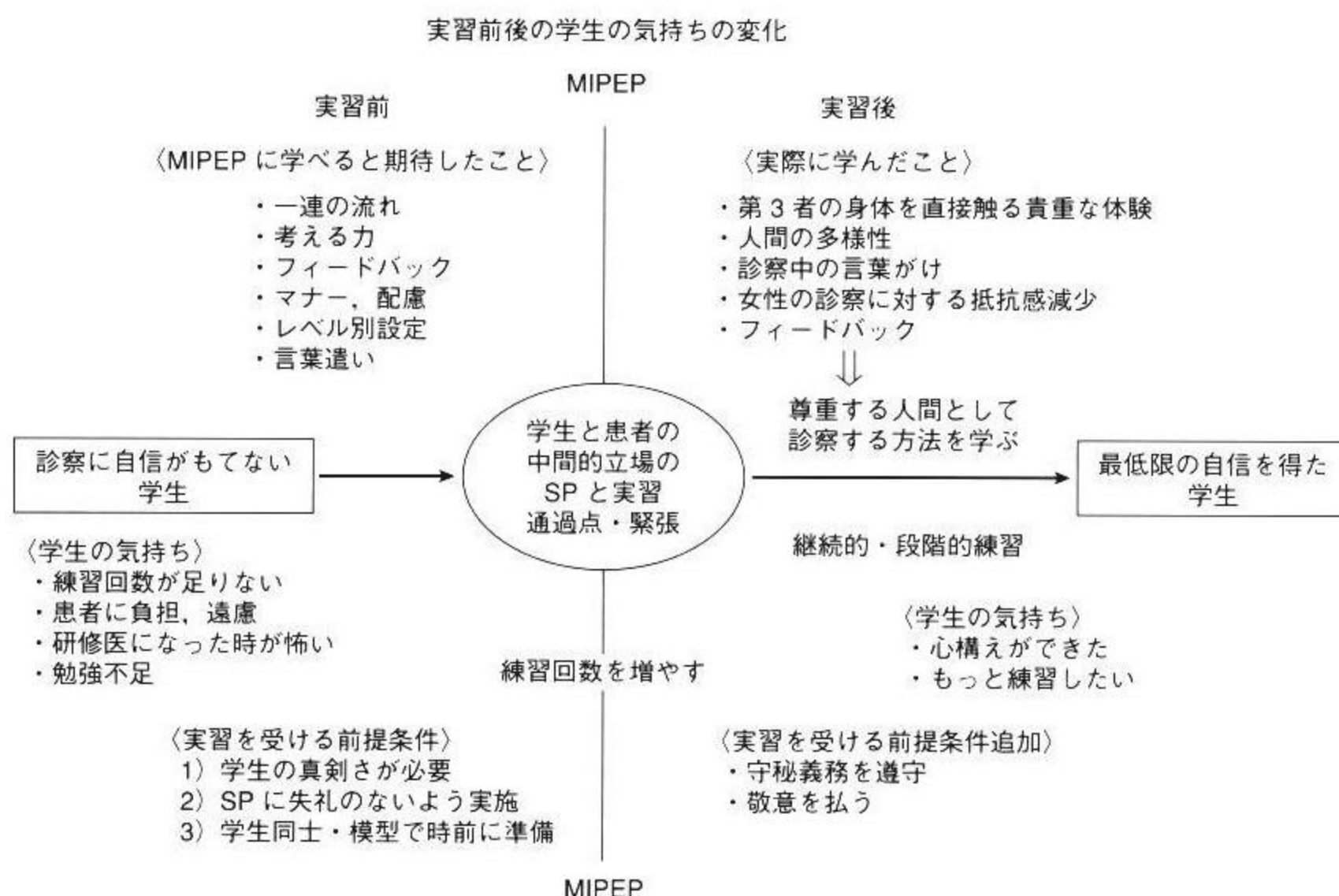


図1 学生 FGD の概念図

段階でのマナーと流れの練習として重要な実習であると位置づけたが、段階的に発展させたレベルに応じた設定（例えば、診察部位の指定のない設定、異常があると仮定しその旨を伝える設定、実際に異常のある設定など）にも強い興味を持っていることが分かった。練習の回数をたくさん経験したいという学生のモチベーションに合わせた継続的実習はより実践的な能力を向上させるのではないかと考える。

## 2) SP の FGD の考察

男女 SP それぞれの実習前後で明らかになった概念を比較し考察した結果、2つの共通点と1つの相違点が明らかになった（図2）。

（1）1つ目の共通点として、男女 SP とも実習前後共通して、身体診察実習は学生にとって、貴重で必要な実習と考えていることが分かった。また、学生にとっての学習効果が確認できたことと、SP の実習に対する不安が減少したことで、男女とも実習後は実習前より、より学生の教育に積極的に関与したいと思っていることが明らかになった。

（2）2つ目は、学生の前向きな姿勢が SP の気持ちに強く影響を与えることが分かった。実際の身体診察実習では学生が期待通りの態度であったことから、男性 SP は違和感を持つことがなく、今後、身体診察実習が広がり発展して行くことを希望していた。女性 SP も同様に不快感を抱くことはなく、学生の熱心な態度に実習前の不安が減少し、さらには1人でも多くの学生に経験させてあげたいという好意的な気持ちを感じていた。このことから、男女とも学生の真摯な態度に触れることで積極的に協力したいという気持ちが沸き起こってきたことが明らかになった。反対に、学生の態度が不真面目であると、SP の協力は消極的になることが示唆され、学生の前向きの姿勢の大切さが SP にとっては重要な要素であることが明らかになった。

（3）相違点として、男性 SP は教育方法に、女性 SP は学生の態度に最も高い関心を持っていたことが挙げられる。男性 SP は実習前後で事前準備の重要性を繰り返し述べていた。実習前に必要なこととして、学生の真摯な態度、SP に対する

## 実習前後の SP の考えの変化

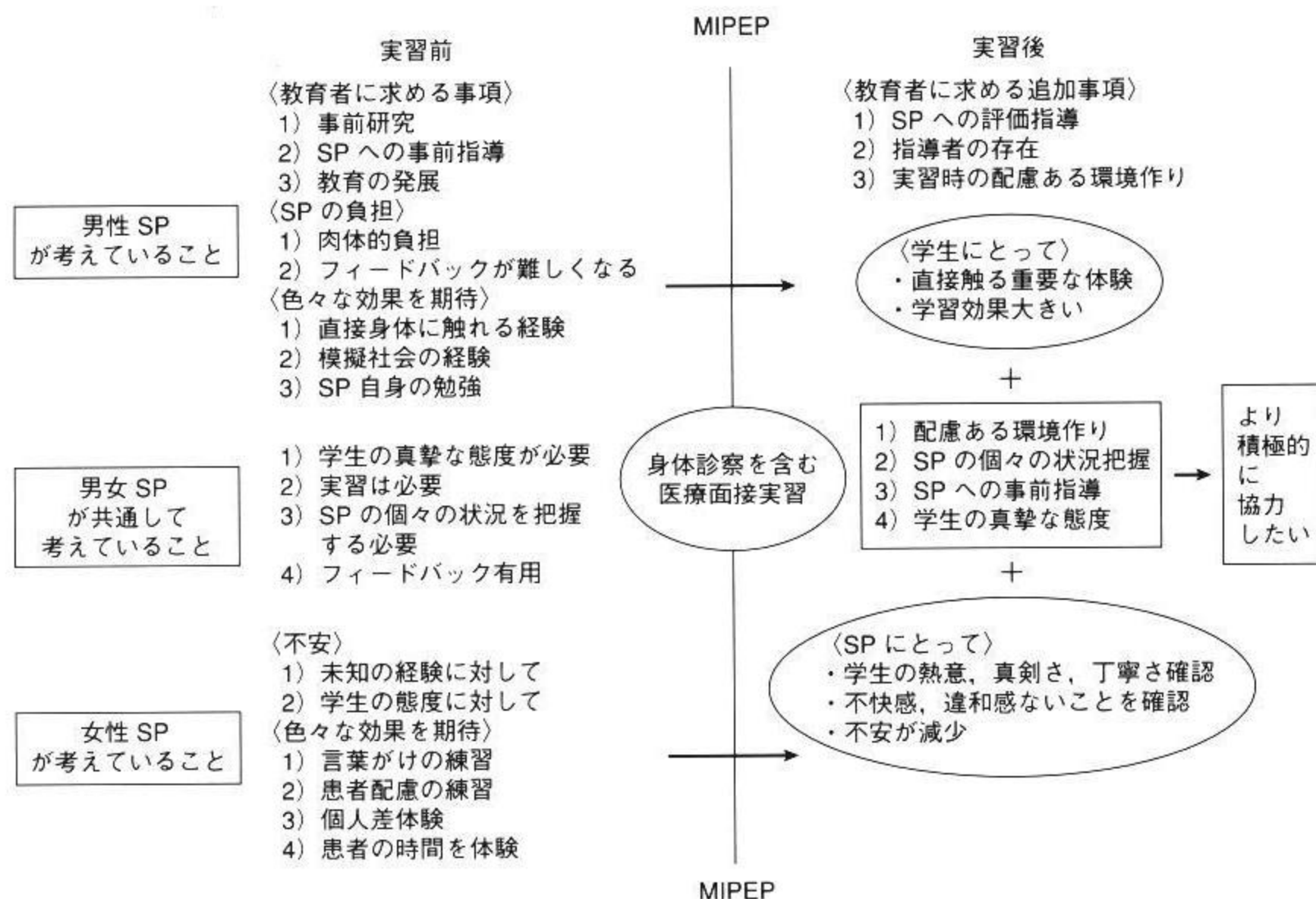


図2 SPFGD の概念図

教育、SP の個々の状況の把握が挙げられ、実習後はそれに加えて、SP に対する評価指導と実習室の配慮ある環境作りというさらに具体的な項目が挙げられた。一方、女性 SP は実習前後を通して、教育の方法論というよりも、相手となる学生の態度が最も関心の高い項目であることが明らかになった。

### 3) 学生と SP の考察

学生と SP の考察を照らし合わせると、学生は医療面接と身体診察実習を行う条件として、SP に失礼にならないような配慮が重要事項として挙げられているのと同時に、SP 側からも学生の真摯な態度が必要と考えられていた。この両者の考えの一致は医療面接と身体診察実習を実現させるための重要な鍵になるのではないかと考えられる。

### 4) 研究の限界と今後の展望

SP の年代に偏りがあったこと、また、参加学生は各学年のメーリングリストあるいは口コミで

集まったこと、さらに、身体診察実習の実施者が FGD の内容分析を行ったという点で、客観性に限界があると考えられる。今後、多様な年代層の SP と他大学を含む広範囲の学生の中から無作為に対象者を選んで実施し、第3者による分析を行うことが今後の課題と考える。同時に医学生同士、下級生の協力、教員の協力を得た学習方略も検討すべき課題であると考えられる。

## 4. 結 論

医療面接と身体診察実習は学生にとって、患者に対するマナー、配慮、言葉がけなど、眼前に現れた尊重すべき人間に対する接し方を学ぶという教育意義があることが示唆された。また、身体診察実習の今後の発展のために、1) 実習時の配慮ある環境作り、2) SP の個々の状況の把握、3) SP への事前指導、4) 学生の実習に向かう態度を十分配慮し準備をすることが重要であると考えられる。

本研究は文部科学省科学研究費「萌芽研究(2)『医療面接及び身体診察に貢献する模擬患者養成に関する研究』(15659121)」の一環として行われた。

## 謝 辞

本調査に快くご協力いただきましたSPの皆様および学生に深謝いたします。

## 文 献

- 1) 藤崎和彦, 尾関俊紀: わが国での模擬患者 (SP) 活動の現状, 医学教育 1999, **30**: 71-76
- 2) Anderson BM, et al: The Growing use of Standardized Patients in teaching and evaluation. *Teach learn Med* 1994, **6**: 15-22
- 3) Barrows HS: An Overview of the uses of standardized patients for teaching and evaluating clinical skills. *Acad Med* 1993, **68**: 443-451
- 4) 大滝純司: 模擬患者 (SP) によるコミュニケーション教育の有用性. *JIM* 1995, **5**: 812-817
- 5) Novack DH, et al: Medical Interviewing and Interpersonal Skills Teaching in US Medical Schools; Progress, Problems, and Promise. *JAMA* 1993, **269**: 2101-2105
- 6) Stillman PL, et al: Results of a Survey on the Use of Standardized Patients to teach and Evaluate Clinical Skills. *Acad Med* 1990, **65**: 288-292
- 7) Fletcher KE, et al: The Physical Examination of Patients with Abdominal Pain: the long-term effect of Adding Standardized Patients and small-Group Feedback to a Lecture Presentation. *Teach learn Med* 2004, **16**: 171-174
- 8) Colliver JA, et al: The effect of Using Multiple Standardized Patients on the Inter-case Reliability of large-scale Standardized Patient Examination. Administered over an Extended Testing Period. *Acad Med* 1998, **75**: S81-83
- 9) John L, et al: Assessing the Usefulness of Using Standardized Patients in a Clinical Medical Course. *Acad Med* 1992, **67**: 286
- 10) Roman MS, Cater A: Evaluation of the Red Blood Cell and plasma Transfusion Guidelines. *Int J Qual Health Care* 2000, **12**: 11-17
- 11) Robins LS, et al: The Effort of a Standardized Patient Instructor Experience on Students' Anxiety and Confidence Levels Performing the Male Genitorectal Examination, *Teach learn Med* 1997, **9**: 264-269

## て が み ・ CORRESPONDENCE ・ て が み ・ CORRESPONDENCE ・ て が み

### 基礎医学実習における注射針の廃棄

昨今, 注射針の誤刺による感染事故を防ぐために, どの病院でも注射針の廃棄方法について厳密なルールを設けるようになってきている. さらに, レジデントの研修および学部生の臨床実習において, 針の廃棄ルールをきちんと教育することは常識となっている.

ところが, このような流れの中で盲点になっているのが, 基礎医学実習における注射針の廃棄である.

基礎医学実習においても, 学生同士で採血を行ったり, 実験動物から採血したりすることは珍しくない. 組織学実習における血液塗抹標本の観察, 生化学実習における血糖値の測定, 法医学実習における血液型の検査など, 基礎医学実習でも血液をサンプルとして用いる実験はたくさんある. 私の専門である細菌学の実

習でも, 血液細胞による細菌貪食像を観察するために採血が必要である.

しかし, 多くの医科大学では, 注射針の廃棄方法を付属病院のルールとして定めているため, 病院に所属しない基礎医学教室は針捨てルールの適用から外れてしまっている. その結果, 基礎医学実習における注射針の廃棄は, ルール不在の状態で, 各担当教室まかせになってしまうことが多い.

しかし, 医学生が初めて採血を体験するのは, 基礎医学実習であることが少なくない. なにとともに, 教育は最初が肝心である. 基礎医学実習においても, 臨床実習並みのきちんとしたルールに従って, 注射針の廃棄を行うべきである.

(自治医科大学感染・免疫学講座細菌学部門  
林 俊治)